

飛鳥池遺跡

飛鳥藤原第93次調査 現地説明会資料
1998年10月18日

炉跡が点在する東側の鉄工房跡

鉄工房から投棄された廃棄物の堆積（炭層）

石敷井戸全景—井戸端会議の声、聞こえますか？

炉跡—脇の石は熱した鉄をたく台石



銅の製品と未製品（銅人形の長さ6.8cm）



鉄滓と鍛造鉄片



ガラスツボの出土状態



「道口師鉢」と墨書きされた鉄鉢形須恵器（径18cm）



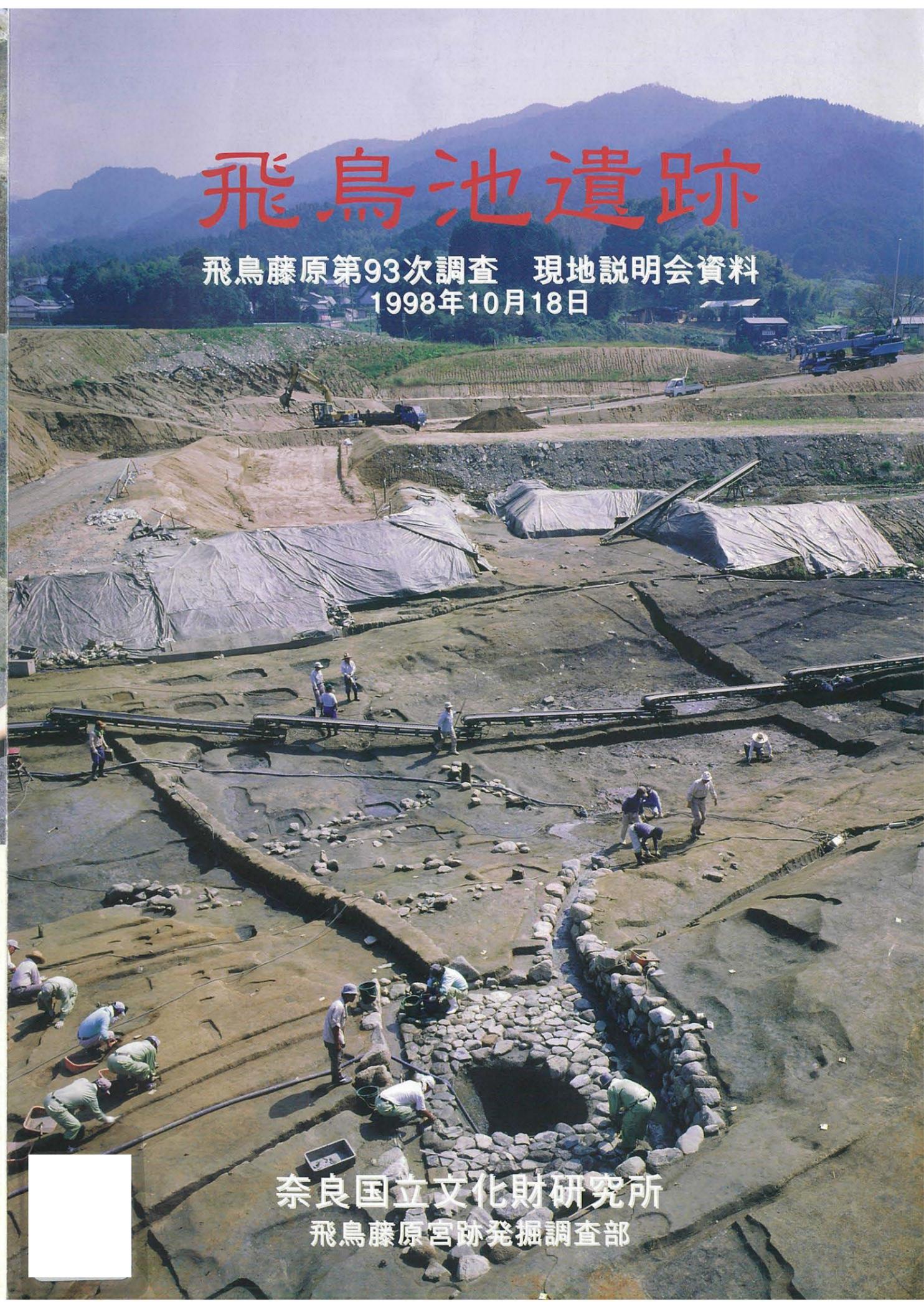
「鮑耳酢一斗」

(179mm)



「賀賜評塞課部里」
「人蝮王部斯兆俵」

(195mm)

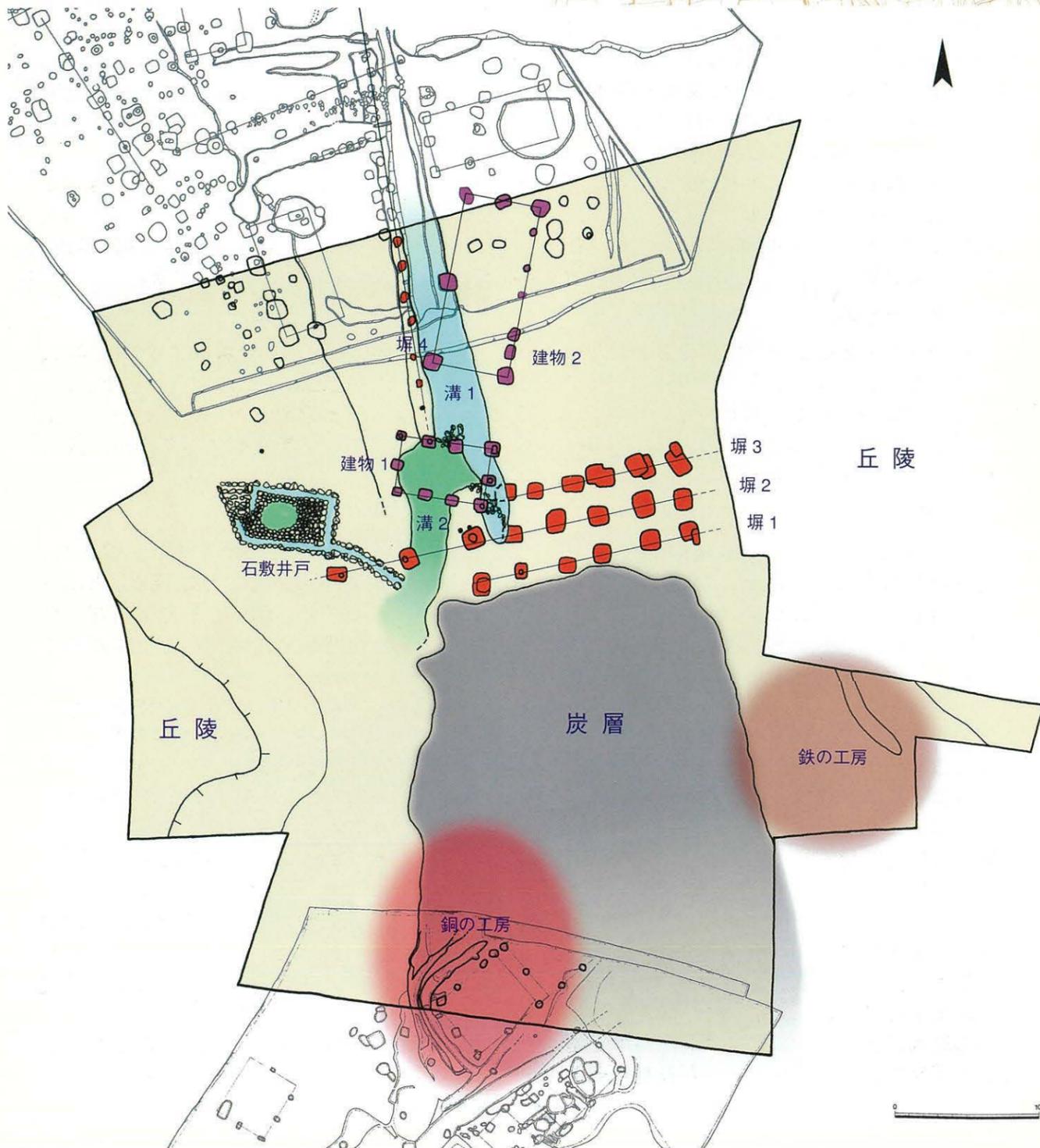
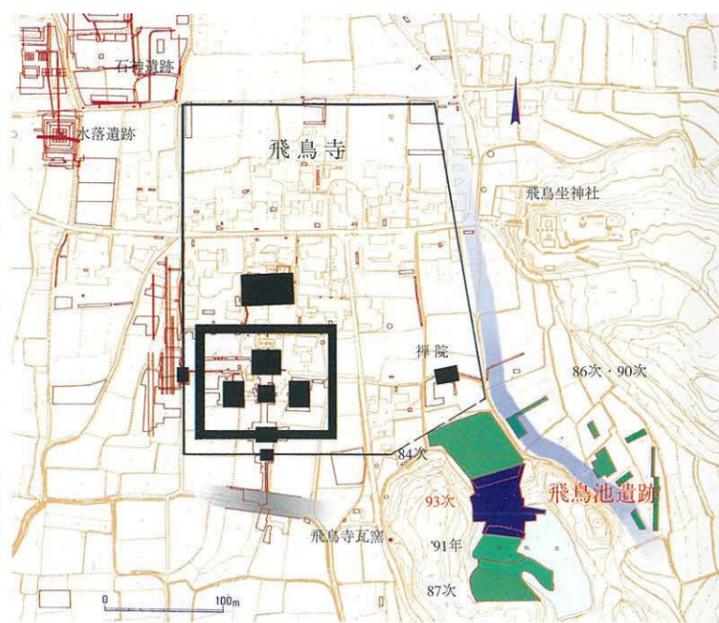


奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥池遺跡とは？

江戸時代に作られたため池「飛鳥池」の池底深くから、1991年に姿をあらわした遺跡、それが飛鳥池遺跡。飛鳥寺の寺域の東南に接し、飛鳥時代歴代の宮殿とも指呼の間にあるこの遺跡では、7世紀後半から8世紀初めにかけて、金属やガラス、漆など多様な工芸品が生産されていた。

その後、この遺跡の上に奈良県が「万葉ミュージアム（仮称）」の建設を計画し、1997年1月から再び発掘調査が始まった。日本最古の金銀工房や、ガラスなど大量の宝飾品を生産した工房、あるいは「天皇」木簡など飛鳥最大の木簡群が見つかり、新聞紙上ににぎわせた。今回は、遺跡の北部（第84次調査区・97年）と南部（91年調査区と第87次調査区・98年）との間の地区を調査し、遺跡の全体構造の解明を目指している。98年7月に着手した調査は現在も継続中。調査面積は2187㎡、周辺を含めた「万葉ミュージアム」関連の発掘調査総面積は9500㎡に及ぶ。



みつかった遺構

飛鳥時代後半（7世紀後半から8世紀初め頃）の炉跡や工房で生じた廃棄物堆積層など金属生産に関わるものの他、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、井戸などがみつかった。

塀1～3 塀1～3は、東西両側から遺跡を抱くよう延びる丘陵が最もその距離を狭めた所に位置し、谷を閉じていた。建て替えがあり、塀2が最も新しい。塀2の柱直径は30cmもある。柱間は2.4～3mと一定せず、塀2は西の2間が4.5mと広い。

谷の奥の様子 塀1～3の南側、谷の奥には、調査区内で東西約20m・南北約25mの範囲に当時の廃棄物堆積層（炭層）が厚く堆積していた。炭層の東と西には、丘陵の斜面を造成したテラスがあり、ここに多数の炉跡が並ぶ。金属製品を加工・製作した作業場（工房）だ。これらの工房から捨てられた炭や灰、道具のかけらや失敗品などが永年にわたって積もったのが、真っ黒な炭層。炭層の東半分からは大量の鉄滓が、逆に西半分からは銅製品や銅滓が掘り出された。となると、谷の東は鉄の工房、西は銅の工房。はたして東の工場の床面上の土からは、ごく小さな鉄片（鍛造鉄片）が多量にみつかった。炉の脇に据え置かれた石の上で赤く熱せられた鉄を叩いて鍛えた時、火の粉のように飛び散った鉄片だ。

谷の出口の様子 塀1～3の北、谷中央には、谷に集まる水を北に流す排水路がある（溝1）。溝1は塀から北約40mの所にある石組の四角い池（第84次調査区）に流れ込み、さらに北東に排水されて、当時の運河に注いでいた。溝1の南に溝2が流れ込む。これらの溝が埋まった後に建物1・2が建てられた。

塀1が丘陵に取り付くすぐ北には、石敷井戸がある。井戸枠は抜き取られていたが、井戸まわりの台形の石敷と四周の石積の壁がみごとに残る。南北4m、南辺6m、北辺8m、北西隅には階段がある。石積は北で高さ0.3m、南は最高で1.1mある。石敷の南東隅には、幅0.5m、長さ5mの石組溝があり、石敷周囲の溝の水を南にある谷に流す仕組みになっている。

さまざまな出土品

炭層や溝1・2などから大量の遺物がみつかった。特に炭層からは、ルツボ、フイゴの羽口、鋳型や砥石など、金属製品を作る道具や鋳滓のほか、銅・鉄の製品と未製品や切屑が出土した。製品には、銅や鉄の釘、鉄斧、銀鑑づけされた銅管、銅人形、銅ピンセットなどがあり、加工の過程がわかるものもある。ほかに、木簡、木器、土器、瓦がある。炭層はすべて土嚢に入れて持ち帰り（現在3万袋）、水洗して調査中。乞うご期待。

遺跡の性格

飛鳥池遺跡は、塀1～3を境に、北と南の二つの地区に分かれることがわかった。塀の北、飛鳥寺までの地区は、出土した木簡からみて、飛鳥寺と深い関わりがある。崇峻元年（588）創建の飛鳥寺は、天武9年（680）に官寺に準ぜられたし、天武11年（682・一説に天智元年（662））には入唐僧道昭（629～700）が「禅院」を創建した。北の地区は、この禅院推定地に隣接する。

塀の南は工房地区。炭層の堆積範囲は南北80m以上に及び、その両側に多数の炉跡をとまなう工房が点在する。これらの広がり3000㎡をこえる。また、工房から廃棄された炭層は、土嚢にして10万袋を超えると推計される膨大な量。ここでは、金・銀・銅・鉄・ガラス・メノウ・水晶・漆など、ありとあらゆる工芸品を作ったことが判明している。これだけの業種が一カ所で操業した遺跡は他になく、その規模も群を抜く。今調査区では、谷の西に銅工房が、谷の東には鉄の工房がある。谷の奥、第87次調査区には、金・銀・ガラスの工房の存在がわかっている。工房地区は業種ごとの配置がきちんとなされていた。

出土品には、銀鑑づけで作った銅管があり、91年には銀鑑そのもの出土している。この技術はすでに水落遺跡の水時計に応用され、飛鳥に時を告げていた。また、ガラスルツボや小玉の鋳型は、全く同じものが韓国の百濟地域でみつかり、当時最新の技術。660年に滅亡した百濟から工人達が渡来し、ここで仕事をしていただろうか。

古墳時代以来の銅や鉄の技術に、これら最新の技術を加えた飛鳥時代最大の生産規模を誇る総合工房＝コンビナート、それが飛鳥池遺跡の工房群だった。

